

生活の伝承 8

発行者 民家園のつどい
会長 斎藤久一
発行所 福島市五老内町3番1号
福島市教育委員会
文化課内
民家園のつどい



民家園のさいのかみ（平成8年）

尾形良吉氏撮影

卷頭言

石に聞きたいこと

秋山 政一

日本のどこにも名のついている石がある。ここ福島にも、ばくち石、ベニ石、一つ石、かめ石、さとう石、座ぜん石、もちずり石、びくに石などのほか、各地にもあって、形や大きさもふくめて、それぞれに意味や由来が語りつがれ、尊とばれてきた。

石そのものの力を信じて、けずつては薬にしてきたものや、薬師堂に供えられている耳石のように、川原から穴のあいた石を拾つて供えると、耳の病がなおるといつてきたのもそれであった。

しかし、刃物をとぐ 砥石 は、死者をお棺に納める「入棺」に、棺の蓋に釘を打つとき、金槌ではなくて必ず砥石が使われる。砥石が何か特別の力をもつていたと考えられていたようである。

また、どこの家にもあった炉（いろり）には、そのいろいろの中心に深く ほど石 が埋められていた。縄文時代の住居跡から発見される 炉 にも、中心に一つ大きな石があつて、その廻りを囲むように小石が並べられている。この石にも、きっと祈りがあったものと思われる。

また、石を加工して作った摺臼や、ほりくぼめて、水車の米つき臼などにも使ってきたが、それらも家々のまつりには、しめ縄で飾りつけをして尊んできた。

さらに、どこの家にもある庭石を見てみよう。置かれた石が何のへんつもない石でも、その石の在り方によって、その庭が醸し出す雰囲気は格別なものになる。石が私たちに何かを語りかけているからである。

こうして石が持つている 不思議な力 は、まだまだ私達にはわからないことが多いようである。

民俗の伝承

権現様の思い出

久間木 忠雄

部落の鎮守様は「にわとり権現様」と言う。三年生(昭和七年)の時「村社水雲神社」という碑が建つまで正式の社名を知らなかつた。

にわとりの絵馬が沢山拝殿にぶら下つてい

て絵の品定めをしたものである。

明治の初めは水渡神社と言つたことがあるとか。廢寺となつた部落の養福院の山号が見渡山だつたことと関係があるようだ。

四畝「十余歩の境内の周囲には樹齡二百年以上の杉が二十数本植えられ、鎮守の森とはこのことだと思つていたものだ。

境内の周りは百庚申で「申」と彫つた様々

形の石がたくさん並んでいたし、太神宮、猿田彦神、足尾山、雷神、馬頭尊等の碑も立つ

ていて、子どもの遊び場に快適な所だつた。

毎日夕方おそくまでここで遊んだ。お祭り

の外に「雨呼ばり」、庚申まつり、「ひしやり」(さなぶり)なども行われた。風が吹くと杉の枯葉が沢山落ちるので争つて拾つて持ち帰

り新の足しにした。根元が腐つて空洞になつた大杉にすづめ蜂が巣をつくり、それをいた

慰労金を捻出する手段で、五錢十錢一口で自分で番号を選んで記名(奉賀帳)する。

前夜引いたくじの番号で賞品が決まる仕組み、氏子みんなが集まるので翌日のお祭りが更に盛りあがる。

当日は早くから式典が行われ、鳥帽子姿の村長さん、大夫(官司)さん、サーベル下げた駐在さんに統いて、祭礼委員たちが社務所から静々と社殿に入り式典が行われる。

「おまつり」

昔は旧暦二月十九日だつたが、新暦(太陽暦)になって四月十七日がお祭りとなつた。学校から揃つて参拝し、官司のお祓いを受け、経木に包んだお赤飯をもらつて帰つた。授業はお休みだつた。

前日早朝に轍りがあげられる。轍の風にな

びく音、横木のきしむ、ギーギーと言う音を聞き、明日の賑やかなお祭り風景を想像しながら寝入つたものである。

一週間も前から若者たちが、祭り太鼓の練習を夜遅くまで続けて、お祭り気分を盛りあ

げてくれた。うきうきして当日の来るのを持ったものである。

又前夜祭と言うのか前日の夜「無尽講」が行われ、抽せんでいろいろな賞品があたる。

くじを引けば何かあたると思つ込んで、くじを引くのに大騒ぎした。これは若者たちの



広瀬座との思い出

尾形 良吉

民家園で広瀬座を見る度毎に思い出されるのは、昭和十三年頃のある日のこと。

親父(雇主)から、良吉つさん、今夜松栄座(松川町)の芝居終つたら役者の人等、梁川の広瀬座まで送つてくれるよう頼まれたの

で運転手と二人で行くよう言われた。当時は自動車運転免許を取るために、トラックの見習助手としてボロトランク一つで住込み、月給は十二円、喰ふことには不足しないが勞

働はきつい、毎月タバコ屋の、お菊ばあさんは、

に、菓子タバコを借り、月払いのため月末に

は手取りも残らない。今夜は仕事ついでに芝居、只で見られることはありがたい。

近在の若者等は、芝居を見ながら公然と一時

のデートを楽しみにやつて来る。残念ながら私は此れから仕事、デートなど思ひもよらず、

芝居終るまで物語の場面の可愛い娘役の美女にほればれとしながら舞台に見入つて居つた

民俗の伝承

子供の頃村の風景

稔田羽

民家園の廻遊路の阿部家前の道向に火の見櫓があり、その下にボンブ小屋がある。中にあるボンブは私が子供時代鳥谷野村にあった手押ボンブと同じ型のもので懐かしく眺めている。

子供の頃はワンヨウーボンブと呼んでいた。その理由は（当時の消防団員の話）火事場まで近い場合はよいが遠くなればなるほどくたびれる。それで最初は簡卽からシユードと勢い良く出るが間もなくチヨロチヨロとなる。そして掛け声もワンヨイからワンヨウと変るのでその名を冠したと。何処まで本当かはさだかでない。

又火の見櫓のことを半鐘と呼んでいた。この半鐘の打ち方にはきまりがあつたので紹介する。

1、乱打又は連打とも言う。村内の火災のときのみ打ち鳴す。

1、参連打、隣村の火災をしらせる

1、武連打、隣の隣村の火災をしらせる。

1、壱打、遠くで火災がある合図である。

耳をすませば、村々の半鐘を打つ音が夜の空にこだまする。いよいよ私の出番である。がばとはね起き着物を着て長靴を履きボンブ小屋に急ぐ。

ボンブ小屋では消防団員の人数がたりないので、必至で団員集めに懸命であった。待つことしばし、団長は人数があとから追いつくので出発する。子供にボンブ車を繩で引役を手伝つてもらいたいと思いながら、あえぎあえぎ火事現場に到着する。火事は農家で家の半分が猛烈な火おいで燃えており、もはやワンヨウーボンブでは手に負えない状態であった。団長や駐在巡回が本家はどうでも消せない。納屋や馬小屋などを守れと大聲で指示している。

それから間もなく火勢がはげしくなり「グシ」が落ちてその火炎は天に登るサマであった。私も花火は何回も見ているが、そんなたぐいのものは問題にならないほど壯観、壯絶である。

私は胸の動気が止まらず茫然として眺めていたが、気がつきその場をはなれた。半鐘はまだ続いている中を帰途につく。

地震、雷、火事、親父と言われているが、まさに火事はむごいと思われた。火事の家は私の小学校の一級上の女の子の家であった。彼女はこのあとどうして暮らすのか頭が二杯となつた。

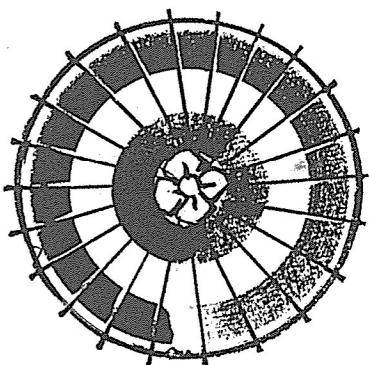
昔の農家は民家園と同じように草葺き屋根で、家の中から火が出ればたちまち屋根は燃えやすい素材でワンヨウーボンブではなくても手に負えない代物だった。

民家園に設置されている消防装置がどんな放水型式なのかよく知らない。草葺屋根の場合、屋根の上に放水したのでは効果は少ないと内側より火の手を止めるしか手がないのである。民家園は文化財が集合しているので火事を出してはならない施設である。

火の見櫓より始まり、いろいろ述べたがワンヨーボンブをたまには小屋から出して磨いてやるとかしたいものだ。当時のどさまわりの興業では、見物する客も握飯に味噌漬けでは、役者に花も飛ばなかつたようであった。私の記憶では今でも曾我ノ家の名前が頭の中にも残つて居る。

我々も明日又早く仕事、眠い目をこすりながら車庫に帰る。

当時のどさまわりの興業では、見物する客も握飯に味噌漬けでは、役者に花も飛ばなかつたようであつた。私の記憶では今でも曾我ノ家の名前が頭の中にも残つて居る。



が、やがて終演となり、一座の荷積みが始まると、何と荷物は衣装箱とコウリ（行李）合せて五個、座長始め四人、芝居の中の美女は何と手持ちの年増のかあちゃん、いやはや、芝居の熱も醒めてしまった。座長は助手席に、残り座員と私はトラックの荷台に、荷台の真中にゴザ、周りに衣装箱コウリで囲み、頭から顔を出して見張り役、定員オーバーで途中真夜中に警察に見つかり拘まつたのでは大変。尚当時の道路は砂利道がほとんどで荷台の座員は大変きつかったと思われる。此の時代は当り前だったが、車は深夜二時頃梁川町広瀬座に到着、広瀬座では明日開演とか、今夜の寝る場所、食事、風呂はなどと考えると役者さんも重労働。

要二やんの茶のみ話

— その五 —

加藤重芳

「茶のみ話」は、きつい田畠の仕事の合間に、みんなの一服という「休みの時」とか、食事がすんだあととの昼休みに、その時の仲間のうちの誰かが話し手になつて、いつもその時々の話ををしては、みんなを喜ばせるものであつた。

このくつろいだ大人たちの「茶のみ話」の間に、新しく仲間に入った若者たちは、黙つてそれを聞きながら、大人になるための勉強をこつそりやついていたのである。

だから、「茶のみ話」は、いつも若者たちが大人になるための教科書であつたし、語り手はその指導者であつた。

秋の夜長になつて青年夜学が始まつた。要三も夜学に行きたいが手間取の身分では定刻には行かれない。

ある夜、教室に入りそびれて床下に入つたら豊之助先生が話をしていた。聞いているうちに腹が張つて来て大きな音を出してしまつた。

「何だ要二君かあ。そんなどこに居ねで中さへえれ」と言われて教室に入つた。

「縁の下では話聞えねべ」と言われたから「教室のみんなは上の空で聞いていつから外の方がよく聞えるつす」と返した。

「そうだ、みんなが我輩の話をよく聞いて全部呑込んでくれば外に滅れない道理だ」といわれた。

【一升酒】

尾形校長は大の酒好きだ。村会議員の家を訪問しては御馳走にあづかっていたが、極つて一升の酒をチョッと残して辞するを常とした。

或時わけを聞いたところ、「一升残らず呑みつくすと、お上さんに後心配をかけるから少し残して帰るのだ」と言つた。どうして分量が判るのかと聞いたら、「初めて酒を呑んだ訳ぢやあるまいし、酒は呑むが是か、呑まさるが非か」と言つた。

【宍戸豊之助のこと】

明治の末、福島に女学校が創立された。良家の娘さまの学校は若者達の注目を集めるところとなつた。

役人は風紀の乱れを恐れて校舎の周囲に「からたち」の垣根をつくつて障壁とした。そこで我が豊之助先生、その垣根の所で大衆の前で大演説を行つた。

「諸君、姑息無能な役人共は我々の良識を信頼せず、かくの如きものを作つて能事足りどするが、若し我輩がここに入らんとするには、何の雑作もないことである。これから

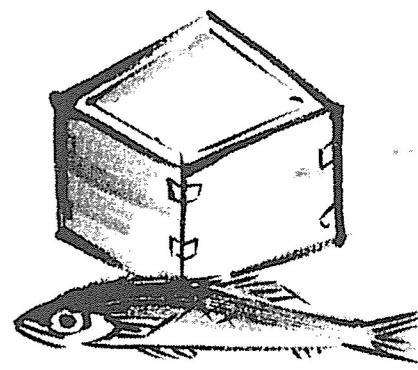
諸君にその方法を傳授しよう。ここに大きな樽を以て来て垣根に押し込み、樽の底を抜いてその中を通つて往来すれば、何の障害もなく通行出来るのである。

諸君、かくの如く役人共の作った垣根が何の役にも立たないとすれば、我等は何を以て女学生の教育を守ることが出来るであろうか?」

集まつた人達には賛成者がモットヤレーとる」

応援したがそのうち巡回がかけつけて豊之助先生はブタ箱に入れられた。

【残つていた五厘】



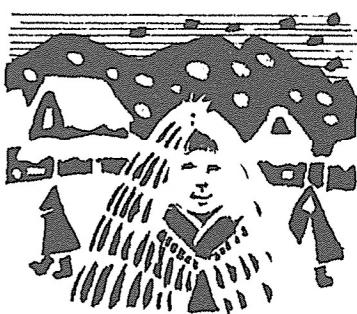
大正七年十二月二十二日、利吉つつあまが死んだ。

【夜学】

村長は名譽職で利吉が収入役兼書記兼小使いをしていた。利吉が死んだので村では困つてしまつた。関係者が集つて事務の整理をしてしまつたが、会計の帳には行かれない。

「利吉つさまでも間違つたか」と言つて帳

ボを振つたら、五厘切手がパラッと落ちた。



【資格がある】

豊之助が役場に行つて、村委会員の前で意見を言った。

ある議員が「宍戸君は資格もないのに何を言うか」と言つたので、「四角（行燈を改良した灯火）はなくとも我輩の家には行燈があるぞ」と言つた。

初めて、わらじを作つて要三やんに見せたら「アレヤーこれは珍しいもんだ」みんな静かにしている
いまにこいつ這い出すから」と言はれた。

【曇り日に使うみの】

初めてみのを作つて要三やんに見せたら「ウーン このみのは雨の日はきらんに水通すから 天気の日は日がさすし 日専用にしつと良い」と言はれた。

【誰の子】

「要三やん お前の子供何人いるんだえ」と聞かれたから
「あーおれには子供ねえっす」と答えた

(七人ゐた)
「ほだ」とあんめえ お前の家に数多いる

子供は誰の子だえ」というから
「あーあれは家のかあが産したんだわい
おれは子供なしたことねえす」独白

(要三のひとり)と
玉は二ツで子供は七人どうも勘定が合わね

おれは子供なしたことねえす

「あーあれは家のかあが産したんだわい
おれは子供なしたことねえす」独白

腹が痛い それは困ったな 右か左か
左の方だ それでは左バラだな、上か下か
上方だ それは大変だ。

左原の上方では井の内が危い。

【枕】

昭和の初めころ要三の弟の源が、北海道に出稼ぎに行つた。行つたところが、そこはタ

【頭も尻も使いよう】

「言葉は尻につける」「も関係ないつす」と要三がいった

「言葉は尻につける」

コ部屋だった。
源から助けをもとめられて要三は前借金と旅費を借りて助けに行つた。
タコ部屋では粗末なバーラックに、アンペラ布団一枚で大勢の人夫が電柱のような長い材木を枕にしてねていた。

【チ デ キルヨウニ】

天神様にお参りして、字出来るように願をかけた。
願かなつて痔になつて手術をするよくなつた。

【あしぬけ】

監視のきびしいタコ部屋で、虫ケラのようにはばれているタコの中にも強者がいて、前借をしては逃走する。足抜を繰り返す。足抜の〇〇と異名をとつた男もいるという。

鉄砲を打ち掛けられながら石狩川を裸で泳ぎ渡り向岸で尻をたたいてアカンベイをした男もいるという

【佐原の上は井の内】

要三は餅つきも上手だつた。

【餅つき】

毎年暮に十日は、福島の早稲田佐藤屋菓子店で販餅搗をしていた。

餅搗の秘訣は原料の米が一番大切だが次には釜、臼、杵などの道具を良く暖めて冷やさないことだという。

一番臼は、どうしても不出来だが、道具があつたまるに従つて良い餅になる。

次に初めの練を良く練ること 練り半分と

いう。撫くときは臼の高さまで腰を落すこと。
腰高の手先だけでは餅はつけない。

【餅にうらみは数々ござる】

見参呼ぱりに行つて餅を出された。三杯四杯と無理強いされて困つてしまつた。
隙をみて縁の下に投げ込んだらお椀も一しょに投げ込んでしまつたので、「お更り出しでくんなしよ」つていわれて大汗かいた。

【食後のお湯】

十四・五のころ
待ちに待つたお正月になつて、今日は腹一杯白餅が喰へると思つて膳についた。
あんまり意気込んで喰い始めたもんだから一膳喰つたところで何思つたか湯を注いでしまつた。

【おとこのおなご】

「何だ要三^{二七}が眞合でも悪いのか」と言はれたので助かつた。
「ハイ今日は調子がいいから先づ湯でのどしめてからうんと御馳走になるつす」といつて腹一杯喰つた。
それからは「要三は湯呑んでから喰う奴だから」と言はれて困つた。

【あんこ餅】

「オイ／＼そっはお前と同じだぞ」と言つたら名倉の野郎の声で

「ナンダこのおなごは男だな」

ケチな日那様に奉公したこと也有つた。年中ケチ／＼暮しているんだが正月のアンコ餅にはどつさり砂糖をぶち込んだもんだ。
甘いものが好きな要三は喜んで喰い始めたが、アンコ餅ばかりで外に何もなく塩つけがなくてはアンコ餅は喰へないもんだと判つた。

【雪兎】

春先友達が病氣になつた。
医者に診せたら肺炎で熱があるから冷やすようにといはれた。

金も人手もないし、要二が白津山から雪を取りつて来て使つた。
だん／＼暖かくなつて雪がなくなりぬる湯から小富士まで登つて雪兎の雪を取つて来て冷やしたら治つた。
雪兎の雪は肺炎にきく

【五リン橋】

七・八才頃(明治三十六、七年頃)五リン橋によく遊びに行つた。

長右エ門(ホラ長といつた)が経営者で親類の川崎という人が頼まれて番をしていた。

三文店もやつていた。

ある時向う側から乞食が渡つてきた。五りん出せというと、そんなら戻るといつて戻つて行つた。

二度渡つたから一錢出せといつたが駄目だった。

奥詣りの行者が通ると子供達が待つていて代垢離といつて川に入つて小銭をねだつた。

奥詣りの行者が通ると子供達が待つていて代垢離といつて川に入つて小銭をねだつた。

【昔の教訓】

借金をすると利息を拂わなければならない。
利息計算は月利息一分(1/4両)につき元金はいくらと定める。普通月利息一分につき元金二十両二十五両、三十両位になる。これを「二十両箇、二十五両箇、三十両箇と呼ぶ。二十両箇は年一割五分、二十五両箇は一割二分、三十両箇は年一割になる。

【各論・各説】

大雨で軒端の雨だれの切目がなくなると川増(洪水)になるという説

地震で、いろいろの鉄びんがろぶちにぶつかる

と家が危ないという説

川の中の石は川増の度に川上に登るという説

川増のとき鰐(カチカ)は石を呑んで重みをつけるという説

山芋が年をとるとうなぎになるという説

猪はぼたん鍋、馬はさくら鍋、猫はおしゃます鍋という説

山道で蛇に会つたら「わらびの恩を忘れるな」と言うと蛇がおとなくしなるという説

餅を喰つたり、御馳走を頂いたら必ず白湯は呑め、白湯を呑んで未だ腹に余裕があるところを見せるべし。さもないとあいつは湯も呑めない程喰つていつた、卑しい奴だとそしられる。

【蟹のはさみ】

田畠の行き帰り、空籠や空タンガラは逆さに背負へ、畠荒しの疑いを受けない。

勝負事は下手で何やつても駄目だ。一度くらいい勝つてみたいと思って、蟹とジャンケンして下され」と頼んだ笑い話がある。

儀重ヤンの声で、

広瀬座は、伊達郡梁川町内の北本町一番地、広瀬川の川べりに建てられていました。明治二十一年（一八八七）に竣工したが、創立者は、生糸の染川人二十余名の協力出資者で、当時としては都に劣らない芝居座であると誇った。昭和六十一年（一九八六）の洪水で浸水、また同地区の河川改修のため解体を余儀なくした経過があつた。

民家園で、原型だけは残されることになつたのは幸いであった。それは、明治初期の県北の文化人たちが心の中に「都にもある文化を得しよう」とした思いが、この建物のどこからも感得できるからである。

正面のぶたいには、ほぼ中央に、まわりぶたいが設けられ、向かって左手（下手）の奥には、ならくに降りる階段がのぞいている。このぶたいのうらには、がくややかつらべやふろばと便所がある。このがくやの階上にも、がくやどうぐべやがある。たくさん役者が寝とまりしていたのである。

ぶたいの手前中央は、ますせきで舞台に向かって右手には、つうろと、その後にさじきがある。これは左手のはなみちの後方のさじきと対になっている。この左手のはなみちの後には、うらはなみち

がついている。さらにさじきは一階にもある。観客の中には、ますせきに座るより、さじき料を拂つても、高い所で見たいということがあつたのである。

入場料を拂う場所は、きどといつて、きど錢を拂つて大人札をうけとり、きどくちに入る。げそく料を拂つて下足をあづけて、げそく札をもらつて、ますせきにつくのであつた。

ますせきの中ほどにある渡り板は、幕合に「おせんにキヤラメル」と売り歩く売人の通路であつた。

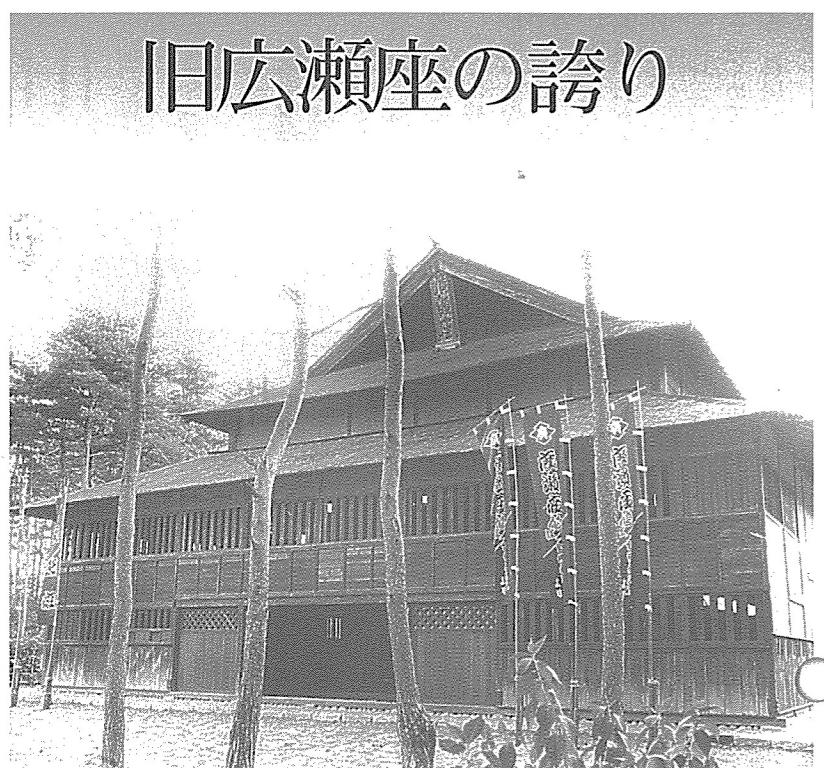
ところで、ざつと数えて一〇〇年ほどの間

に、この広瀬座で芸人としての誇りをもつて演出してきた人たちの思いが、楽屋などの壁板に落書きとなつて残っている。

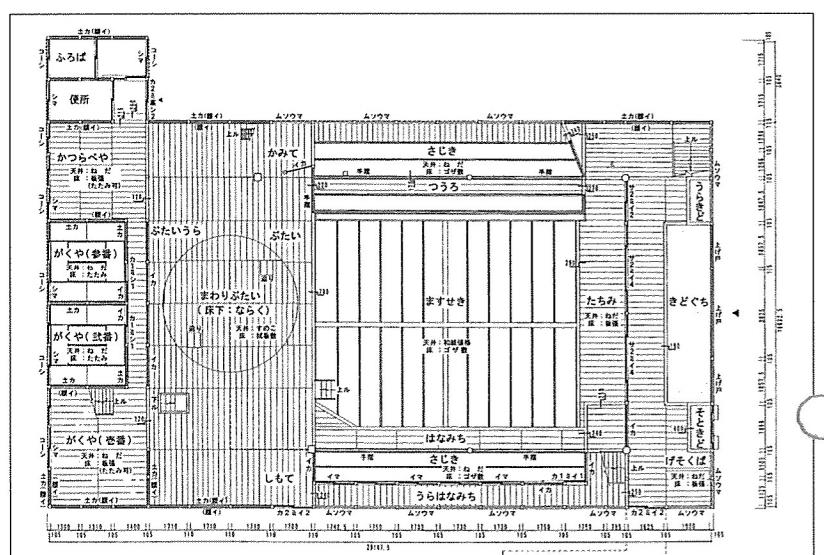
また、たくさんの芸人たちが、それを身につけてはこの舞台で大見栄を切つたであろう、歌舞伎衣装が保存され、各の芸を観客に知らせようとしたのに違いない。

ほかに、昭和になつてからのものであるが、広瀬座が映画館に変身した折の上映を知らせする辻びらも残されていて、これをたどれば映画の歴史が見えそうである。

こうして広瀬座には、一〇〇年前の明治の人びとの思いがこもつている。



旧広瀬座正面



旧広瀬座平面図



旧広瀬座のかくやの落書き

旧馬場家は、南会津郡南郷村宮床字居平五二八一に、今まで数えること一八九年、きびしい冬も、草木の繁殖する夏の湿気にも堪えて、馬場家の人がとにかく快適な住居として役目を果して来たのである。

ここに移されたのが平成七年、この馬場家にゆかりのある人たちによって移築完成されたもので、殊に意義深い建物である。

馬場家は徳川時代に農業の側ら漢方医を兼ねていたため、村内でも格式高い家柄であった。

建坪一〇〇・四平方m(五四・九坪)馬屋をふくめて部屋数一〇室を数えることができた。馬屋の二階は、民具の倉庫で貴重なものが多い。

雪の多い冬を越すための生活用具が数多く保存されている。殊に「そり」は、大きさにも大小あり、かつて春先に山から燃料の積みおろしをした跡が数々しのばれる。

馬屋と住居が一つ家にあることも注目されるが、屋根のぐしに草が生えているのは「くれぐし」という名のぐしおさえである。

くれというものは、土壌などにある土止めに使うくれのことである。

また蛋白資源としての川鰐の道具には、その大きさや手入れの様子などが残っていて、馬場家の人がひとつの心を読みとることができる

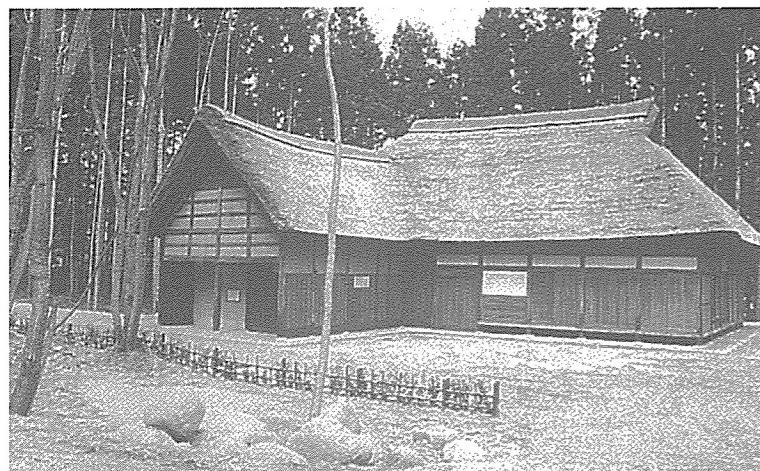
「にや」といわれる台所の一部に展示してある「臼」は、この馬場家にある「臼」の中の最も古いもので、その構造は「杵」と共に注目されてよいものである。

この臼の底は、真中が深く先細りで、これは一緒にある杵の、一方の先端と対比して見なければならない。

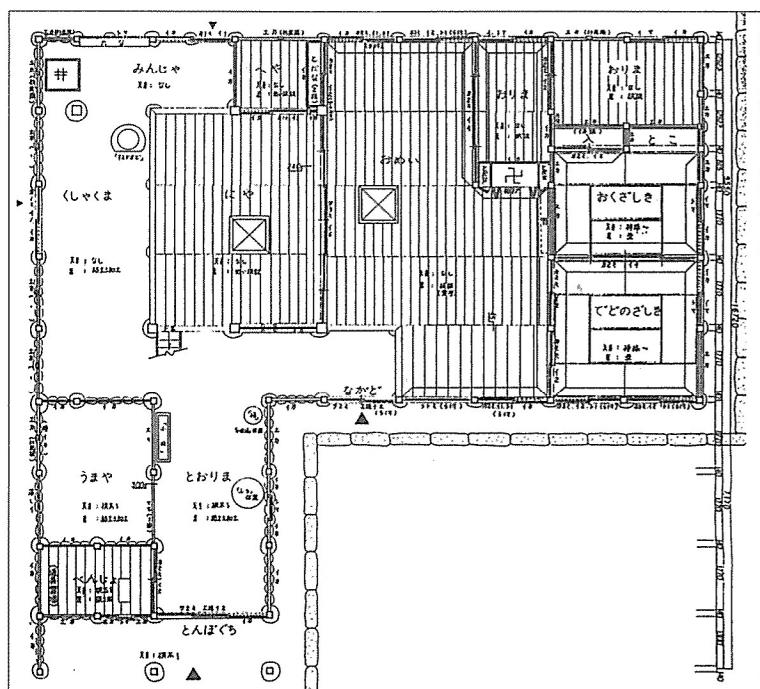
この、臼と杵は餅をつく臼ではないことが明らかで、かつて、稗や穀をついて精臼しなければならなかつたときの、最も重要な道具であった。

その地方の人たちが、自分の暮らしに合うように自分の道具を工夫し、つとめてこれを使いこなしてきたのが「民具」というものである。

旧馬場家の民具



旧馬場家全景



旧馬場家の正面図